湖に沈んだ村

尚江千軒遺跡

尚江千軒遺跡は米原市朝妻筑摩沖の湖底にあります。『近江国坂田郡志』などに「かつて尚江と称する大村があったが、正中二年(1325)十月十一日の大地震のため、わずかな家を残し全部落が湖中に没した」とあります。また、筑摩神社には正応４年(1291)に描かれ、２回の模写を経て最後に江戸時代に写されたとされる絵図が伝えられています。

『絵図』には、筑摩神社から約六丁(654m)の馬場が湖岸の大鳥居まで延び、その南北には「神立」「西邑」の２集落が描かれていますが、現在ではいずれもみることができません。この部分が水没したと推定されています。

筑摩神社には、絵図の内容によく符合する永禄10年(1567)成立の『筑摩大神之紀』があり、すでに湖岸の大鳥居が水没していることを記しています。この大鳥居などを求めておこなわれた滋賀県立大学の水中考古学の調査では、朝妻湊跡沖の湖底で12世紀中葉を中心とする土師器皿・須恵器甕・山茶碗・常滑焼片口鉢・軒平瓦・丸瓦などが多数発見されました。筑摩神社沖では、７～８世紀の須恵器横瓶を共伴する石群が確認され、『絵図』にみられるような湖岸に築造された横穴式石室墳と副葬品の可能性が指摘されています。また、粘土質の土層に人為的に掘りこまれた２基の土坑が確認され、検証の結果、これらの遺構は大地震などで一気に湖底に沈下した可能性が高いようです。

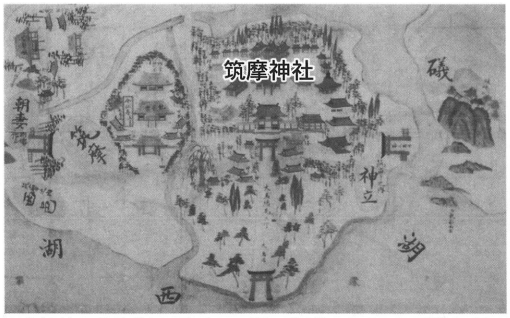
湖底遺跡調査風景(滋賀県立大学林研究室)

平成21年度 埋蔵文化財活用事業

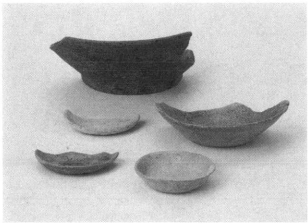
琵琶湖にある約100の湖底遺跡のうち、ある時、湖辺にあった村が突然湖底に没したと伝えられる「水没村伝承」や湖底に道があるなどの伝承をもつ湖底遺跡は約12ヵ所あります。とくに、湖底に村が沈んだという伝承地は琵琶湖北湖の東西両岸に集中しています。その多くに、村の規模とは関係なく、水没伝承の表現として「千軒（せんげん）」が付けられています。

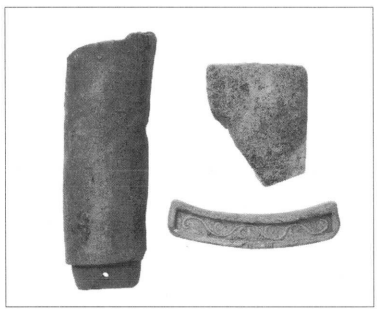
太古の時代、琵琶湖（古琵琶湖）は現在の三重県伊賀周辺や甲賀・日野・蒲生周辺などをさまよい、30～40万年前に現在の位置に落ち着き、１万数千年前にいまの姿になりました。その後も河川からの土砂や波の影響、人為的な埋め立てで湖岸線が変化してきました。とくに、唯一湖水を排出する瀬田川の流出量によって、湖水量や湖水面の高低がたびたび左右されましたが、現在は、南郷洗堰（なんごうあらいぜき）によって水位（基準水位標高84.371m）が調整されています。尚江千軒をはじめ、集落そのものの遺構が見つかっていないため、まだまだ謎の多い湖底遺跡群です。

『筑摩神社絵図』



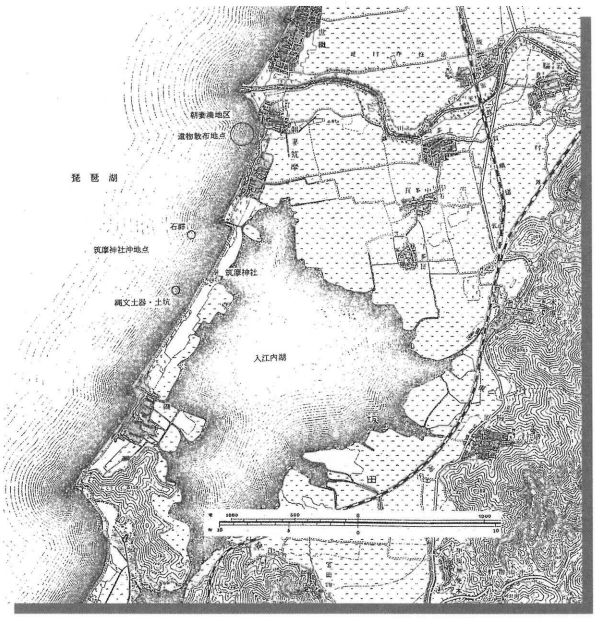
筑摩神社から湖岸に延びる馬場、湖岸の大鳥居、「神立」「西邑」の村が水没したと推定されています。


陶器・土師皿

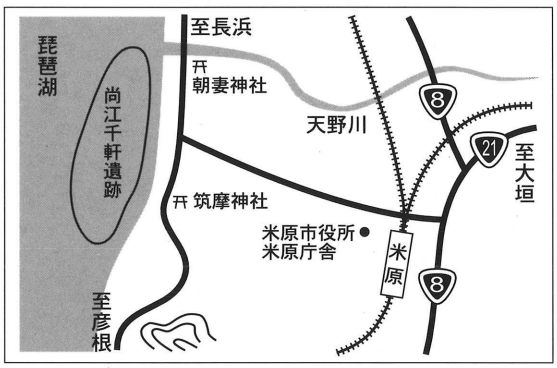

軒平瓦・丸瓦

朝妻湊跡沖で出土した軒平瓦（のきひらがわら）は、尾張で製作され京都で使用予定のもので、運搬途中に朝妻湊の一角にあったものが洪水などで湖底に運ばれたと推定され、東国から琵琶湖を経由する輸送ルートが明らかになりました。

海底の土杭（上）
須恵器横瓶（下）
（滋賀県立大学林研究室提供）



湖底遺跡調査位置図



尚江千軒遺跡

■ 所 在 地　滋賀県米原市朝妻筑摩、磯の湖底

■ アクセス　JR東海道線米原駅下車。徒歩約45分。米原市役所米原庁舎にレンタサイクル有り。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1206番地　TEL.0749-55-8106

平成21年度 埋蔵文化財活用事業